

一般講演要旨

第1群 良 性 腫 瘍

1. 子宮内膜症の臨床的観察

(日大)

馬島 季麿, 吉田 孝雄, 前田 勇
岡田 秀彦, 川村 俊夫

子宮内膜症は臨床的には診断困難な疾患で、摘出標本の組織学的検索で証明される症例が多い。これは特有な診断法の不足によるのみならず、その臨床所見が明確でない為と考えられる。そこで我々は最近2年間の手術別出標本について、その病理組織学的検索を行ない、本症30例を証明したので、その30例について臨床的検討を行ない、次のような知見を得た。本症は

- 1) 全患者数の0.9%, 全手術例の10.6%にみられ、かなり頻度が高い。
- 2) 40才前後に好発する。
- 3) 不妊症を伴うことが多い。
- 4) 月経が延長し、経血量が増加する傾向がある。
- 5) 3年以内の続発性月経困難症を伴うものが多い。
- 6) 子宮内子宮内膜症に子宮卵管造影術が有力な診断法である。
- 7) 子宮全剝術並びに一侧ないし両側附属器剝除を施行し予後が良好であった。

以上の知見が今後の予後の本症の診断的中率の向上或いは治療に役立つことをのぞむ次第である。

質問 (三重大) 小南 吉男
美しい子宮卵管レントゲン像を拝見し御礼申し上げます。全例中かゝるレ線像を見られたのは何例でございましたでしょうか。

回答 (日大) 吉田 孝雄
typisch な所見を得たのは一例のみでした。

2. 子宮粘膜ポリープの臨床的観察

(三重大) 利斉 輝郎

頻度は昭和33年7月より昭和39年6月までの間の患者総数33829名中406名、1.2%に発見された。年齢は各年全層に見られるが、40才以上に急激に増加している。経産婦には346例85.3%に見られ、又、未産婦56例中40例が未妊婦であった。主訴としては、不正出血、接触出血を訴えるものが多いが、膣部びらんなどの合併症もあるため、果して本症に起因する出血かどうか断定出来な

い。妊娠合併例は12.5%に認められ、このうち約半数は出血を訴えたため切迫流産との鑑別が必要であった。

癌性ポリープは4例に見られたが、扁平上皮癌1例、上皮内癌1例、扁平上皮癌の疑1例、悪性乳嘴腫の疑1例であった。又、220例についてパパニコロー氏染色法にも膣スミア検査を施行したが、第(I)型が83.2%, 第(II)型が15.2%, 第(III)型が0.8%, 第(IV)型が0.8%, 第(V)型が0%であった。なお癌性ポリープの症例はいずれも第(III)型及び(IV)型であった。粘膜ポリープ発生の原因については複雑であるが、内分泌的因子、機械的刺激、体質の原因が考えられる。又、ポリープと癌とは特に密接な関係があるとは思われないが、ポリープを発見した際の組織学的検索、膣スミア検査の施行等は必要であると考えられる。

質問 (順天堂大) 長峰 敏治

御報告の症例中、子宮体部より発生した例数はどの位ございましたでしょうか。

回答 (三重大) 利斉 輝郎

体部より発生したものは胎盤ポリープを含めて約30例でした。

質問 (日大) 馬島 季麿

1) 胃ポリープは悪性化の傾向が強いが、頸管ポリープは幸いにも悪性化の傾向が少ない。しかしまれには癌化を認めることがあるので、常に組織検査を怠つてはならない。その摘除に際しては組織を損傷させないために私はいつも耳鼻科で使用するシュリンゲを使用している。

2) ポリープの原因の一つとして炎症が重要なものと考えているが、頸管炎またはピランとの合併は何%であったでしょうか。

3) 同一人に反復して発生するのをしばしば経験しているが、反復例は何%に認めましたか。

回答 (三重大) 利斉 輝郎

① 反復したポリープは私は一例を見たのみでした。他医にて処置されたものもあるかも知れません。

② 頸管炎、膣部びらんを合併したものは約半数でした。

3. 石灰化子宮筋腫の2例

(横手市平鹿病院) 斉藤 博之, 菅原幸一郎